

研究ノート

近世の定宿講と旅行者

—浪花講の事例から—

高橋 陽一

はじめに

日本の近世社会において、人々が旅をする上で最も重要な施設は宿駅であり、その中の宿屋であろう。陸上交通体系の柱である宿駅伝馬制は、幕藩領主の交通を直接担う組織として作り上げられたが、幕府や藩は宿屋の設置そのものには関与しなかった⁽¹⁾。ただ、当時の旅の隆盛ぶりからすると、実際に宿駅存続のカギを握っていたのは、幕藩領主関係の御用交通ではなく、商用・私用による一般旅行者の宿屋利用の盛衰であろう。

旅行者が利用できる宿屋に本陣・脇本陣・平旅籠・飯盛旅籠・木賃といった呼称があったことはよく知られている。宿駅において、こうした宿屋が仲間組織を結成していたことも明らかにされており⁽²⁾、江戸・京都といった都市部における宿屋の存在形態については詳細な研究がある⁽³⁾。

ただし、宿屋の社会結合は宿駅や都市内で完結したのではない。近世後期には全国各地の宿屋が一堂に加盟する協定組合（講）も誕生した。その嚆矢であり代表が浪花講である。浪花講は旅行者が安心・安全に宿泊できる宿を定宿に指定した講であり、飯盛旅籠の増加を背景に結成されたとされる⁽⁴⁾。こうした定宿講の誕生は、旅を広く大衆化させた要因の一つであり⁽⁵⁾、講の発展により庶民の旅の施設が充実し、旅行者の便宜は格段に向上したと高く評価されている⁽⁶⁾。定宿講の歴史は旅行史上の画期的動向として見逃すことはできず⁽⁷⁾、宿駅全体の存立を考える上で重要なテーマであるといえよう。しかし、浪花講をはじめとする近世の定宿講に関しては、概説的にしか語られることはなく、その運営や利用の実態が研究として深められてはいないように思われる。旅行者が実際にどの程度の頻度で定宿講を利用していたのか、といっ

- 1 深井甚三「水運と陸運」（大津透ほか編『岩波講座日本歴史12 近世3』岩波書店、2014年）。
- 2 深井甚三「宿と町」（『幕藩制下陸上交通の研究』吉川弘文館、1994年）。
- 3 保谷七緒美「江戸の宿仲間の基礎的研究—旅人の止宿をめぐる諸問題の分析から—」（『論集きんせい』13、1991年）、佐々木夏妃「近世京都の宿屋と都市空間—三条大橋西詰・中島町を中心に—」（『史林』97-6、2014年）。
- 4 浪花講の概要に関しては、大島延次郎『日本交通史』（四海書房、1942年）384頁、今井金吾「江戸の旅」（『江戸の旅風俗—道中記を中心に』大空社、1997年）、同「解題」（『道中記集成39』大空社、1997年）、深井甚三『江戸の宿—三都・街道宿泊事情』（平凡社、2000年）95-97頁、池上真由美『江戸庶民の信仰と行楽』（同成社、2002年）18-22頁、山本光正「旅行案内書の成立と展開」（『国立歴史民俗博物館研究報告』155、2010年）、森悟朗「神風講社と浪花講・三都講・一新講社」（長谷部八朗編著『「講」研究の可能性』慶友社、2013年）などを参照。
- 5 原淳一郎「近世寺社参詣史の現状と展望」（原淳一郎・中山和久・筒井裕・西海賢二『寺社参詣と庶民文化—歴史・民俗・地理学の視点から—』岩田書院、2009年）。
- 6 註4 今井「江戸の旅」。
- 7 山本光正氏によると、講の成立に伴う定宿帳等の道中記（旅行案内書）の出版が、19世紀の道中記全体の出版増加に寄与しているという（註4 前掲論文）。旅と出版物との関係を考える上でも、定宿講は重要な素材であるといえよう。

た基本的な点すら具体的に明らかにされていないのである⁽⁸⁾。

本稿もまた、研究といえるほど深い議論を展開する用意があるわけではないが、こうした現状を打開する一つのきっかけとして、浪花講発展の足跡をたどりつつ、旅行者の道中日記をもとに、浪花講定宿の利用実態とその特徴の一端を明らかにしてみたい。

1 浪花講の成立と展開

1 浪花講の成立

浪花講は、綿打器械の唐弓弦を商う大坂玉造上清水町の松屋甚四郎を講元とし、松屋の手代源助を発起人として結成された。成立年は文化元年（1804）説と文化13年説があるが、先学では後者が有力視されており、その根拠になっているとみられるのが「浪花講創立手続書」である。「浪花講創立手続書」は郵政博物館収蔵「駅通志料」の『宿屋規則集』⁽⁹⁾の中に収められている。明治13年（1880）4月の改正浪花講成立に際し、近世に三都講を組織するなどしていた荊豆屋茂左衛門によってまとめられた浪花講の沿革である。これによると、甚四郎らは商用で全国をめぐる中で、一人者が宿泊できず、また売女等を抱える宿屋が多く、行商の者が困惑する姿を目の当たりにしたことから、文化13年（1816）に「誠実ノ旅店」を選んで「浪花組」を結成した⁽¹⁰⁾。同じく郵政博物館収蔵で、講加盟の宿を紹介した定宿帳『諸国定宿帳浪花講』⁽¹¹⁾（文久3年〈1863〉）の「口述」は、講の趣旨を次のように記す。

諸国道中筋定宿并定休所ニ此通り木の看板かけ置申候、是を目当ニ御泊可被成、尤諸事実意御世話申売女飯盛など決てすゝめ不申候、是当講の矩定也、御安心ニて御泊可被成候、万一右看板有之方ニて龜末之儀在之候ハ、其宿名前御記し被下書面を以大坂松や源介方迄御しらせ被下、早速定宿替可申候、以上

講の看板を掲げた宿屋に宿泊すれば売女飯盛等を勧められる憂いはなく、もし粗末な扱いがあれば、申し出によって定宿を代えるとしている。旅行者に安心して宿泊できる健全な宿を提供するというのが、浪花講の講是であった。天保10年（1839）の『浪華組道中記』⁽¹²⁾によると、講加盟の宿屋に宿泊するには鑑札が必要であり、仲間に参加した旅行者は鑑札を宿屋に預けて宿泊した。



写真1 「浪花講創立手続書」

8 筆者は『近世旅行史の研究—信仰・観光の旅と旅先地域・温泉—』（清文堂出版、2016年）、および『旅と交流にみる近世社会』（清文堂出版、2017年）において、近世旅行史研究の深化を試みたが、定宿講については研究対象にできなかった。

9 資料番号SBA-53。

10 ただし、今井金吾氏によると、宿屋の選定は相当以前より始められていたという。寛政年間の発行とみられる『定宿附道中記』には、大坂の「まつや源介」ほか、後の浪花講定宿帳に登場する宿屋が数多く確認できる（註4『道中記集成39』）。

11 資料番号SJJ-11。

12 註4『道中記集成39』。



写真2 『諸国定宿帳浪花講』表紙



写真3 『諸国定宿帳浪花講』「口述」

2 浪花講の展開

「浪花講創立手続書」によると、文政5年(1822)、講設立の功績が認められた発起人の松屋源助は、独立して宿屋営業を始めた⁽¹³⁾。講の名称は当初「浪花組」であったが、天保12年(1841)に「浪花講」に改められた。弘化3年(1846)には、鑑札が贋造されるようになったことを受け、木札から織物製の鑑札を代えている⁽¹⁴⁾。また、嘉永5年(1852)の『浪花講定宿帳』⁽¹⁵⁾巻末には、「浪花議定書」として、講世話方などと称して定宿帳への加盟料や看板料を申し立てる者は全て偽りであるなどと明記されている。講を語った詐欺まがいの事件が横行しているのは、それだけ講が繁栄していた証しとも受け取れる。「浪花講創立手続書」によれば、発起人源助の宿屋も繁盛していたようである。

講加盟の宿屋を列挙した帳面が定宿帳である。設立当初の文化年間の定宿帳はみつかっておらず、発足当初の加盟宿屋数は判然としないが、文久3年(1863)の『諸国定宿帳浪花講』には全国1808軒⁽¹⁶⁾の宿屋が紹介されている。表1は『諸国定宿帳浪花講』で紹介された東海道の宿屋180軒の一覧であり、講に選定された宿屋は各宿駅1、2軒ほどであったことがわかる⁽¹⁷⁾。これだけの宿屋数は講の設立当初から不変だったわけではない。天保10年(1839)の『浪華組

- 13 天保10年(1839)の『浪華組道中記』(註4『道中記集成39』)によると、その場所は日本橋北三丁目堺筋周防町であった。
- 14 この点、山本光正氏より、実際の鑑札は木札に布製の袋をかぶせたものであるとのご教示をうけた。郵政博物館に調べていただいたところ、ご教示の通り、布製の袋が確認できた(資料番号1564-38)。袋には「此鑑札袋持参無旅人は当講内之人ニは無之候」、木札には「織物袋無この木札不用」とあり、袋と木札をセットで所持することを講加盟の証しとする方針であったことがわかる。



写真4 浪花講鑑札(袋(右)と木札)

- 15 『道中記集成41』(大空社、1997年)。
- 16 宿所・休所・宿坊を含め、船問屋等を除いて計算している。
- 17 畿内の浪花講定宿は、鎌田道隆・安田真紀子「道中記・定宿帳にみる近世大和の宿場と宿屋」(『奈良大学総合研究所所報』8、2000年)でも紹介されている。



写真5 『諸国定宿帳浪花講』「京々伊勢参宮大和めぐり大坂道」

道中記』の宿屋は968軒であり、その後もしだいに追加されて1808軒にまで増加したのである。表2は、各年代の浪花講定宿帳の中で宿屋が紹介される街道名を列挙したものである。五街道のほか、白河以北のいわゆる奥州街道、北国街道・伊勢参宮道・金毘羅参詣道といった通行量の多い主要街道・参詣道は天保10年時点ですでに宿屋が紹介されており、嘉永5年(1852)にはいわゆる江戸浜街道(江戸-水戸-岩沼)、羽州街道(桑折-久保田)、盛岡・青森道、広島・長崎道といった街道のほか、秋葉鳳来寺道・三峰山道・熊野道・草津温泉道といった参詣道・温泉道が追加され、上方・伊勢間の参詣道も加増されていることがわかる。さらに、文久3年(1863)には、成田・相模大山・出雲大社・大宰府・有馬などへの参詣道・温泉道が加えられると共に、「京々伊勢参宮大和めぐり大坂道」などの「めぐり」と表記される周回コースが紹介されるようになっていく。こうした参詣道・温泉道・周回コースは商用ではなく、一般の旅行者を想定して盛り込まれたことが明らかであろう。文久3年『諸国定宿帳浪花講』の巻末には主要都市の書肆が列挙されており、大衆向けに広く頒布されていたと考えられる。

以上のように、浪花講は結成後順調に加盟宿屋を増やし、路線を全国に拡大した。商用利用者の不便解消が当初の結成目的であったが、時代が下るにつれ、それ以外の一般の旅行者を積極的に取り込もうとする講元側の姿勢をみてとることができよう。

2 旅行者の浪花講利用

1 道中日記からみえる浪花講利用状況

浪花講の展開を述べてきたが、果たして旅行者は実際にどの程度の割合で浪花講の定宿を利用していたのだろうか。旅行者の書き残した旅日記(道中日記)から、この点に迫ってみたい。

表3～表7は、東北地方を出発し上方・伊勢神宮方面を巡った旅行者の道中日記の記述から、宿泊地・宿屋名を列挙したものである。このうち、浪花講の定宿を利用している場合は太字で示した。定宿の典拠としたのは旅行年の前後で年代的に最も近い浪花講定宿帳であり、表3『西国道中記』(天保12年<1841>)・表4『伊勢参宮道中記』(嘉永2年<1849>)・表5『伊勢参宮道中記』(嘉永3年<1850>)は天保10年(1839)¹⁸⁾と嘉永5年(1852)¹⁹⁾の定宿帳を、表6『伊勢参宮道中記并宿附帳』(安政3年<1856>)・表7『参宮道中諸用記』(文久2年<1862>)は嘉永5年(1852)と文久3年(1863)²⁰⁾の定宿帳を参照した。両者のいずれかに登場する宿屋を利用してれば、あるいは登場していなくても道中日記中の宿屋名の脇に「浪花講」などと注記されていれば講を利用したとみなしている。

18 註13『浪華組道中記』。

19 『浪花講定宿帳』(註15『道中記集成41』)。

20 『諸国定宿帳浪花講』(註11)。

表3『西国道中記』は、伊勢参宮、西国三十三ヶ所礼所巡礼（西国巡礼）、大坂・奈良・京都巡りに金毘羅参詣を加えた旅であり、往路東海道・復路中山道のルートも含め、近世後期の東北から上方への旅の一つの典型である。合計86泊のうち浪花講定宿の利用は芦野・幸手・大坂・下村の4泊であり、利用率は約5パーセントである。

表4『伊勢参宮道中記』は、伊勢参宮後西国巡礼を行わずに奈良へ向かい、堺近郊の福町で記述が終わっている記録であり、松坂をはじめ各地で酒色に耽る様子が記録されているのが特徴である。合計55泊のうち浪花講利用は13泊で、利用率は約24パーセントである。

表5『伊勢参宮道中記』は、伊勢参宮後西国巡礼を部分的に行い、奈良・大坂・京都を巡り帰郷している。合計65泊のうち浪花講利用は13泊で、利用率は20パーセントである。

表6『伊勢参宮道中記并宿附帳』は、伊勢参宮後西国巡礼を行わず奈良・大坂・京都を巡り、金毘羅宮まで足を延ばした後に帰郷している（記録は日光今市で終わっている）。合計75泊のうち浪花講利用は12泊で、利用率は16パーセントである。

表7『参宮道中諸用記』は、幕末の女性の旅行記録として著名である。日本海側を通過して上方へ入り、金毘羅参詣、京都・大坂・奈良巡り、伊勢参宮の後、東海道・奥州道中等を通過して帰郷している。合計151泊のうち浪花講利用は61泊で、利用率は約40パーセントである。

以上、現時点では僅か5点の事例しか示せないが、これらから一般旅行者の浪花講利用について、いくつか特徴を指摘しておきたい。

まず、全体的な傾向としていえるのは、浪花講定宿の利用率はそれほど高くはないということである。表3『西国道中記』の利用率は約5パーセントに過ぎず、最も利用率の高い表7『参宮道中諸用記』でも約40パーセントであった。旅行中のほとんどの宿屋が浪花講というケースはおろか、半数が浪花講定宿というケースすら確認できない。次に、時代が下るにつれ浪花講利用率が上昇している傾向をみてとることができる。これはあくまで少ないサンプルからつかめる大まかな傾向であるが、天保年間の約5パーセントから、嘉永・安政年間の10～20パーセント台、文久年間の約40パーセントへと上昇していることがわかる。また、東海道・中山道といった主要街道や江戸・京都といった都市部での利用率が低いことも特徴として指摘できるだろう。東海道でよく利用される浪花講定宿は池鯉鮒の「山吹屋新右衛門」くらいであり、江戸で浪花講定宿を利用しているのは表5『伊勢参宮道中記』のみ、京都ではいずれも浪花講定宿を利用していないのである。

2 旅行者の宿屋選定事情

先述の如く、浪花講は設立以来順調に加盟宿屋を増やし路線を拡大してきた。しかし、本稿の事例からは、実際の旅行者はそれほど浪花講定宿を利用していないように見える。時代が下るにつれ利用率が高まる傾向は見出せるが、それでも取り立てて高い利用率であるとはいえない。このままでは、講の発展により庶民の旅の便宜が格段に向上したという見解には疑問を抱かざるを得ないのである。浪花講の機能を明確にするため、先学の指摘も念頭に、ここで旅行者の宿屋選定に関する情報整理をもう少し進めてみたい。

浪花講定宿には各宿駅で上等な宿屋が選定されたといわれている⁽²¹⁾。道中日記を書き、後年に残すことができたのは村役人をつとめたり、経済的に一程度の余裕を持っていた地域の有力者だが、浪花講の利用率が低調なのはそうした階層でも手が届かないほど講定宿の宿泊料が高額であったからとも考えられる。この点に関し、比較的全国の講定宿を満遍なく利用してい

21 註4 深井前掲書96-97頁。

る表6『伊勢参宮道中記并宿附帳』と表7『参宮道中諸用記』を例に、講定宿とそれ以外の宿屋の宿泊費の平均値を算出した。表6では講定宿13泊の1泊あたり宿泊費は平均約170文、それ以外の(伊勢御師宅と船中宿泊を除く)宿屋56泊は1泊平均約198文、表7では講定宿61泊の1泊あたり宿泊費は平均約571文、それ以外の(伊勢御師宅と船中宿泊を除く)宿屋83泊は1泊平均約649文であった。もっとも、表7は幕末の物価高騰を考慮してもあまりに高額であり、恐らく道中日記に記されたのが同行者を含めた2名分の費用であったとみられ、1名分に換算すれば講定宿は約286文、それ以外は約325文となる。以上から明らかな通り、実際には講定宿の宿泊料金は他の宿屋より総じて低額であり、むしろリーズナブルな価格設定になっていたといえよう。浪花講定宿は、宿泊料が高額であったため利用率が低かったわけではないのである。

また、都市部での宿屋選定に関しては、「近世末には広範囲に、熾烈な旅客の獲得合戦が行われていた。そのため、大多数が大坂・京都を訪れるであろう東国からの参宮者・巡礼者は固く拒否しない限り、伊勢参宮以前に宿の予約をさせられ、必然的にその宿に宿泊することになったはずである」⁽²²⁾という指摘がある。都市部では宿屋による集客合戦が熾烈を極めており、旅行者は旅の途上に勧誘された宿屋に宿泊していたという見解である。この点に関して、表3『西国道中記』の旅行者角田藤左衛門らは、途中の桑名で「京都宿引」にあい、「鐙屋多右衛門手代より樽貫」、伊勢山田でも同じ手代から酒をもらうサービスを受け、結局京都で鐙屋(「あふみや」)に宿泊している。さらに、表5『伊勢参宮道中記』の旅行者大和屋らは、佐屋で京都の「ちくぜんや」から宿引きを受け、京都で「ちくぜんや治郎右衛門」に宿泊し、月本では大坂の「川ちや」から宿引きを受け、大坂で「かわちや又六」方に宿泊している。大坂の浪花講発起人松屋源助の宿屋には宿泊していないのである。都市部の宿屋は主要な街道や参詣路に出店を構えるなどして活発に客引きを行っており⁽²³⁾、旅行者の宿屋選定に一定の影響力を及ぼしたとみるべきだろう。

一方、嘉永4年(1851)に浪花講ほか計4つの講が合同で出版した『大日本細見道中記』⁽²⁴⁾の「附記」には、宿引きにあった際、鑑札を所持していないのに浪花講その他の講の名前を出して定宿があると主張すれば却って面倒であり、定宿があるとだけ答えればよいなどと記されている。講定宿を利用する際には鑑札を提示するのがルールであるが、恐らくこの頃には鑑札を所持していなくても講定宿に宿泊することができたのだろう。

最後に付け加えておきたいのは、浪花講定宿が当初の結成目的に反し、実態として健全な宿屋ではなかった可能性があることである。表4『伊勢参宮道中記』では、陸奥国郡山宿の講定宿海老屋次右衛門方に宿泊しているが、その際「妓八人有」と記している。この記録の旅行者小野寺龍太郎の同行人が「宿妓戯此夜沐」したとあることから、「妓」は売女であった可能性が高い。小野寺一行は道中の宿屋で芸妓らを招いて頻繁に酒宴を催しているが、一方で浪花講利用率も20パーセントを超えている。売女がいることを織り込み済みで講定宿に宿泊していた可能性もあるだろう。また、本稿では具体的に紹介していないが、陸奥国黒沢尻から伊勢参宮・上方巡りを行った『伊勢参詣道中記』⁽²⁵⁾には、同国本宮宿に滞在の際、「渡辺屋式百式十文宿り、

22 田中智彦「道中日記にみる金毘羅参詣経路—東北・関東地方の事例—」(『聖地を巡る人と道』岩田書院、2004年)。また、塚本明氏も「道中記研究の可能性」(『三重大史学』8、2008年)の中で、「道中日記を著す旅人の宿泊は、定宿帳で勤める旅籠屋ではなく、参宮街道等で盛んに宿引きをする旅籠屋をこそ、利用していたようなのである」と述べている。

23 桜井邦夫「近世の道中日記にみる手荷物の一時預けと運搬」(『大田区立郷土博物館紀要』9、1999年)によると、こうした出店は旅行者の荷物を先に宿屋へ運ぶサービスも行っていた。

24 『道中記集成40』(大空社、1997年)。

25 『北上市史12 近世10』(北上市史刊行会、1986年)。

浪わ組なれ共女共有」と記されている。具体的にどのような「女」であったかは不明だが、「浪わ組なれ共」という文脈から、講の方針にそぐわない売女等であったと判断するのが妥当であろう。全国的な状況は不明だが、「売女飯盛なと決てすゝめ不申」という講の根幹的な方針を守らない加盟宿屋が存在したのである。

おわりに

分析対象とした道中日記の数が少なく、さらなるサンプルの分析が最大の課題であることはいまでもない。今後の分析により今回と異なる傾向が抽出される可能性も否定できないが、これからの検証の参考とすべき、浪花講定宿の利用実態に関する仮説を示して拙い小論を終えたい。

- ①年代が下るにつれ講定宿の利用率が上昇しているのは、講の路線拡大、およびそれによる認知度の上昇と関連があるように思われる。ただし、それでも講定宿の利用率は総じて低い。無論、数多くの旅行者が集まる宿駅において、講定宿が1、2軒である以上、宿泊したくてもできなかったという事態は想定されなければならないが、この利用率はひとまず注視すべきであろう。講が多数の旅行者の便宜を格段に向上させたと評価するには、(どのような旅行者が利用していたのかといった点を含め) 今少し慎重な検討が求められるだろう。
- ②東海道・中山道といった主要街道の宿駅や江戸・京都のような都市部で講定宿の利用率が低いことの背景には、これらの町は宿屋の数が多く、各宿屋が出店を持つなどして熾烈な集客争いを展開していたことがあると考えられる。当時、東北地方から江戸・上方方面のような遠隔地への旅は何度も経験できるものではなく、経験の少ない旅行者には出店によるサービスなどの働きかけが宿泊先選定の決め手になっていたのではないだろうか。
- ③本稿の分析で最も講定宿の利用率が高かった、表7『参宮道中諸用記』の旅行者今野於以登は商家の出身であり、個人的な知己を頼って宿屋を選定しているようすが見受けられる⁽²⁶⁾。このことからすると、於以登の講定宿利用率の高さについては、講の認知度の上昇ではなく、結成当初の目的であった商用旅行者の利便性向上との関連を念頭に置き、於以登が各地の商人とのネットワークを介して講定宿を選定していたことによるという見方も排除できない。ただ、この見方のみを採用するならば、講が各地の参詣道や温泉道を加盟路線に組み入れていったことの説明に窮することになる。浪花講は一般旅行者もターゲットにして組織を拡大させており、明治維新後も後継団体が組織されていたことから、やはり講に一定の一般的需要があったと考えるべきだろう。そうした場合、道中日記から判明する講定宿の利用率の低さと講への需要との整合性をどのように考えればよいのだろうか。筆者は、他の宿屋と比べて宿泊料金が低いことから、商用以外の講定宿の利用者に道中日記として記録が残らないような、経済的に余裕のない旅行者が多くいたのではないかと考えている。また、講の鑑札を所持していなくても利用が可能であったとみられること、全体の状況は不明ながら、現実には売女を置く講定宿がみられたことから、旅行者にとっての講定宿の利点は、売女を勧められないという意味での健全さではなく、各宿駅の有力な、なおかつ全国の旅館チェーンに加盟している家にリーズナブルな値段で手軽に宿泊できる利便性のよさと安心感にあったと考えたい。

26 出羽国鶴岡近郊の大山に宿泊した際、「拙宅ノ抱人」である酒造杜氏川内屋万次郎方に無料で宿泊している。

表1 文久3年(1863)『諸国定宿帳浪花講』(郵政博物館収蔵)に掲載された東海道の宿屋

宿駅名	宿屋名	宿駅名	宿屋名	宿駅名	宿屋名	宿駅名	宿屋名
大坂	まつや源助	庄の	石見や喜兵へ		大米や市郎右衛門	吉原	甲州や喜左衛門
守口	新や武兵へ	石やくし	米や弥三郎	浜松	島や甚八	柏原	まつや小右衛門
さた	大和や与兵へ		八百や左兵へ		いたや正八	原	若さや久兵へ
枚方	京や新兵へ	追分	浅州や五兵へ		吉のや弥右衛門		かねぎや十右衛門
橋本	しほや弥兵へ	四日市	山田や作兵へ	天竜川	江戸や吉右衛門	沼つ	大和や五郎右衛門
	角や三郎兵へ		帯や七郎右衛門		酒や権左衛門		元問や伊右衛門
八はた	千とせや弥兵へ		竹や平三郎	見附	大江戸や万太郎	三島	村田や佐吉
淀	三島や喜平次	とんだ	吾妻や宇右衛門		大塚や源八		わたや伊兵へ
伏見	北こくや七之助	まつ寺	江戸や小三郎	袋る	若松や平右衛門	山中	かちや十左衛門
	小道具や弥兵へ	桑名	つたや孫三郎		山田や勘兵へ		大和や源助
京	まつや吉兵へ		さや	京や小兵へ	原川	金田や林蔵	箱根
	亀や吉兵へ	糸ひすや藤八		かけ川	ねち金や治郎右衛門	江戸や十左衛門	
	かゝや与兵へ	つしま	近江や次三郎		常わや藤吉	はた	めうがや畑右衛門
	鍵や半七	名古屋	山田や平三郎	日坂	さかや所左衛門	湯本温泉	福住九蔵
	尾張や源助	宮	近江や清八		川さかや治右衛門	とらや三四郎	
大つ	いつゝや弥兵へ	笠寺	紀の国や易右衛門	さよ中山	東や清蔵	小田原	水島や長蔵
	海老や弥五郎		山しろや吉左衛門		小泉や忠左衛門		羽島や安兵へ
	住吉や庄右衛門	なるみ	山口や藤助	金谷	松や忠兵へ	うめ沢	つたや藤八
	近江や喜兵へ		銭や新三郎		たはこや善右衛門		大磯
	鯨や市兵へ		桑名や松兵へ	松葉や常吉	かぶとや七郎右衛門	森田や久兵へ	
かきや伝兵へ	ぜんご	きくや円助	島田	松や文四郎	平塚	米や又兵へ	
やばせ	ちりふ	みとりや新三郎		越前や治郎兵へ	南湖	江戸や八郎左衛門	
ぜゝ	坂本や伊兵へ	大はま	山吹や新右衛門	藤枝	みなとや喜作	四つ谷	ふちや平左衛門
石山	丸や六左衛門		油や久右衛門		亀田や久平	藤沢	たばこや庄右衛門
せた	伊勢や伊兵へ	矢はき	さゝや又十郎	岡部	江戸や治郎右衛門	江ノ島	みなとや六左衛門
草つ	野村や安兵へ	岡崎	桔梗や半三郎		うつや峠		江戸や伝右衛門
	藤や与左衛門		ふち川	山家や清兵へ	まりこ	米や市郎右衛門	浦賀
め川	いせや与兵へ	木下	菱や喜兵へ	あべ川	池田や源八	金沢	
うめの木	花や万蔵	赤坂	かどや佐七		府中		はふや六兵へ
石部	扇や孫左衛門	御油	若松や仁兵へ	小吉田	大万や清右衛門	程ヶ谷	千代本儀兵へ
	大黒や善十		いとうや伊佐右衛門		万や清三郎		中村や治兵へ
なつミ	餅や庄八	吉田	置や源右衛門	江尻	近江や市右衛門	堺木	いせや吉兵へ
水口	枅や市兵へ		ますや庄七郎		桔梗や半三郎		いなハや源右衛門
	富田や源兵へ	さかミや平左衛門	山家や助五郎	清見寺	大竹や平七	神な川	羽沢や佐兵へ
くり林	もちや六郎兵へ	ふた川	万や助左衛門		とうふや佐兵へ		石崎源六
大の	森田や徳左衛門		白すか	橋本や治郎吉	おきつ	府中や与四郎	川崎
松のを	にはや五兵へ	岡田や吉三郎		西くら沢	清水や次右衛門	浅田や武右衛門	
土山	大こくや長兵へ	あらゐ	三升や久次郎	由比	かしハや幸七	大もり	新田や平三郎
すゝか	てつや藤吉		きの国や弥左衛門		うとんや四郎兵へ		うたや幸助
坂の下	京や権左衛門	まひ坂	めうかや清兵へ	かん原	木瓜や只吉	品川	村田や平兵へ
	小松や文吉	しの原	浅田や善兵へ		かめや幸助		村田や伝右衛門
ふで捨	山形や太右衛門	浜松	帯や七郎右衛門	岩ふち	松むら善右衛門	江戸	島や藤兵へ
せき	玉や利右衛門			吉原	扇や伊兵へ		辻や平兵へ
かめ山	藤や久左衛門						山本市郎右衛門
	玉や仁兵へ						

※宿屋・休所の双方を掲載。

※表記は原文のままだが、異体字は常用体に改めている。

表2 浪花講定宿帳で宿屋が紹介される街道（宿駅に講定宿がある街道）

「浪花組道中記」(天保10年(1839)、『道中記集成39』)	「浪花講定宿帳」(嘉永5年(1852)、『道中記集成41』)	「諸国定宿帳浪花講」(文久3年(1863)、郵政博物館収蔵)
大坂の江戸道	東海道	大坂より京通り東海道定宿
中仙道垂井宿の古や道	土山宿より多賀道中仙道鳥居本宿迄	尾州名古屋の津島天王 夫より伊勢参宮大和めぐり大坂道
名古屋の仙道大井迄	桑名より佐屋廻り津島 名古屋下街道中仙道大井迄	土山宿より多賀道
大坂の木曾街道江戸迄	御油より分れ懸川へ出る秋葉風来寺道	名古屋下海道仲仙道大井宿迄
信州つまご上ノ入口はしバの伊那道中	岩ふち宿の甲府郡内通身延参詣道	御油分れ懸川へ出る秋葉風来寺道
信州追分宿ノ下仁越武州本庄道	木曾街道	御油より気賀道天竜川まで
下ノ諏訪の甲府道	合渡よりせき廻り太田まで	ふち沢の大山石尊道了権現参詣小田原まで
中仙道洗馬の善光寺道	垂井より尾州名古屋道	岩瀬より甲府道身延さんけい道
越後路津軽道	太田より飛騨高山道	大坂より仲仙道木曾路
北国道中記	中津川より飛騨高山道	たるゑ宿より尾州名古屋ミち
大坂のいせ道中	高山より越前福井道	合渡より関廻り太田迄
東海道関の山田道	高山より越中富山道	太田より飛騨高山道
津の江戸道追分へ出る道	広瀬追分の舟津通かに寺道	中津川より飛騨高山迄
東海道土山宿より多賀海道	高山より郡上道	高山より越前福井道
大坂の讃州金毘羅参詣船路	高山より信州松本道	高山より越中富山道
京都の小浜道中	つまご上ノ入口はし場より飯田廻塩尻迄	広瀬追分の船津蟹寺道
小浜より敦賀道	せはより善光寺道	高山の郡上道
江戸の日光道中仙台南都盛岡まで	篠の井追分の仲山道追分迄	高山より信州松本道
中仙道上州倉ヶ野の日光例幣使道并二宇都宮の道	善光寺の越後高田道	妻籠上の入口橋場より飯田廻り塩尻宿迄
宇都宮の日光道中	善光寺飯山道	中仙道せはの善光寺道
西江州道中記	善光寺の草津温泉道	しの、井追分より中仙道追分まで
大坂の北国行淀川横小廻し荷物問屋	下すはの甲府ミち 甲府より郡内江戸道	善光寺の越後高田道
大坂の若山通紀州田辺道	仲山道追分の下仁田通武州本庄道	善光寺の飯田(山カ) 通越後長岡迄
貝塚の浜通粟島ミち	上州高崎の三國通新潟道	善光寺の草津温泉道
大坂の和歌山上高野道	倉ヶ野の日光道	中仙道追分の下仁田通武州本庄道
大坂の天の川越高野山へ道法	下野足尾通日光街道	上州高崎の三國通り越後新潟道
とろ川の五桑廻り高野道	江戸より日光道 仙台南都盛岡并津軽三馬屋迄	下野足尾通日光街道
高野の紀見越大阪道	奥州白川より会津米沢通久保田迄	上州高崎の沼田道
大阪明石通阿州道	桑折ヨリ千浦マテ	倉ヶ野より日光例幣使道
善光寺の中仙道追分迄	江戸より水戸海道并浜通り岩沼まで	下諏訪より甲府郡内通り江戸まで
信州かりや原の保福寺こへ上田ミち	江戸の河越通松山いなり参詣并三峰山道	奥州海道仙台通松前マテ并二宇都宮の日光道
甲府の郡内通り江戸道	飯納通り三峰山道	桑折より山かた通り秋田久保田まで
中仙道太田の飛騨高山道	京の西江州路北国今庄迄街道	最上舟形庄内鶴岡迄
高山の雷山道	京の北国筋小浜つるか今庄街道	水戸通り仙台岩沼迄
あら張追分の美濃岐卓道	仲山道鳥居本北の北海道佐井浦	江戸より下総成田不動参詣銚子迄
中仙道中津川の高山道		西上総木更津津加納山道并登戸の東金八日市八迄

『浪華組道中記』(天保10年(1839)、『道中記集成39』)	『浪花講定宿帳』(嘉永5年(1852)、『道中記集成41』)	『語国定宿帳浪花講』(文久3年(1863)、郵政博物館収蔵)
ひろせ追分る舟津通りかに寺道	越後木崎の会津通白河迄	登戸の東金八日市場迄
高山の郡上道	大坂より高野山并はせ寺道	東上総東金の房州小湊誕生寺道并浜の村の山通小湊道
高山の越前道	紀州加田より大坂迄街道	京都より若州小浜并越前敦賀道
高山の信州松本道	大坂より伊勢参宮道	大津より西江州路越前敦賀今荘迄
	はい原より伊勢本街道田丸越	中山道鳥居本宿より北国筋越通松前まで
	京より奈良迄街道	新潟の会津通奥州白河迄
	奈良の伊賀越井かふと越道	新潟の米沢通奥州福島迄
	上野るかぶとこえ	京の伊勢参宮大和めぐり大坂道
	京より伊勢参宮道	京の八はた参詣まで奈良道
	大坂より河内并たへま高野街道	京の宇治名所めぐり奈良道
	高野より熊野道	京の丹州福知山元伊勢道并切戸の文殊湯島まで
	大坂の若の浦高野街道	丹波福智山の湯島道
	大坂の若山道紀州田辺道	京のあたこ山越丹州かめ山よしみね西の宮迄道
	播磨廻り金比羅参道中定宿	京の能勢参詣大坂道
	金ひらる讃岐路街道	京の山崎通西宮迄
	津田の丸亀迄浜道	大坂よりならあを伊勢参宮道
	丸亀の伊予松山道	奈良の上野通月本迄并上野の東海道関迄
	備前矢板の広島長崎道	はい原の田丸こへ伊勢参宮道
	備前岡山のおの道浜通	奈良の大和めぐり高野山きみの越大坂みち
	小屋の瀬より福岡道	大坂より河内廻り壺阪奈良道
	高山の肥後熊本道長さき迄	大坂の若山道紀州田辺迄
	広島より宮島島田迄	高野の熊野道紀州田辺迄
	大坂より但馬豊岡湯島道	若山の加田高野山榎の尾塚大坂まで
		播磨路中国肥前長崎マテ并金毘羅参詣道
		備前の尾の道へ浜通り
		小屋の瀬より筑前福岡大宰府まで
		山家の肥後熊本并長さき迄
		滝の宮の大坂越阿州むや迄
		津田より丸かめ迄浜道
		丸かめより伊よち大洲郡中みち
		明石の岩屋渡徳島道
		姫路の雲州松江大社迄
		姫路の因幡鳥取迄
		姫路の但馬湯島まで
		大坂の丹波通但じま湯島迄并有馬の湯道

※表記は原文のままだが、異体字は常用体に改めている。

表3 『西国道中記』(天保12年(1841))の宿泊所

月日	宿泊地名	宿屋名	月日	宿泊地名	宿屋名
12月11日	芦野	丸屋与利右衛門	1月24日	(不明)	(不明)
12月12日	喜連川	(不明、脇本陣)	1月25-28日	京都	あふみや多右衛門
12月13日	石橋	(不明)	1月29日	亀山	柵屋五右衛門
12月14日	幸手	釜屋利兵衛	閏1月1日	総持寺	かどや小三郎
12月15-16日	江戸	■■屋茂右衛門	閏1月2日	西宮	大坂屋文吉
12月17日	川崎	矢向屋	閏1月3日	大蔵谷	常本屋治平
12月18日	江の島	渡辺四郎兵衛	閏1月4日	姫路	ひのえ屋庄兵衛
12月19日	大磯	柵屋定右衛門	閏1月5日	有年	赤屋利七
12月20日	箱根	山田屋善吉	閏1月6日	岡山	岩田屋甚之助
12月21日	吉原	万屋源蔵	閏1月7日	下村	油屋藤右衛門
12月22日	久能山	とうふ屋伊右衛門	閏1月8日	丸亀	福島屋文重郎
12月23日	藤枝	浜松屋庄七	閏1月9-10日	串田	あたらしや儀助
12月24日	森町	蛭子屋保兵衛	閏1月11日	香登	米屋清次郎
12月25日	戸倉	大田屋次郎右衛門	閏1月12日	片島	吉田屋庄次郎
12月26日	門谷	小松屋仁兵衛	閏1月13日	(不明)	(不明)
12月27日	藤川	(不明)	閏1月14日	馬瀬	花屋重兵衛
12月28日	名古屋	をこし志や	閏1月15日	竹田	とふふや茂兵衛
12月29日	桑名	境屋三右衛門	閏1月16日	宮津	ほふ来屋茂八
12月30日	津	八百屋利兵衛	閏1月17日	中山	井筒屋清兵衛
1月1日	山田	野村屋	閏1月18日	本郷	藤や又右衛門
1月2-3日		三日市太夫次郎	閏1月19日	追分	橋本屋徳左衛門
1月4日	三瀬	前野屋常右衛門	閏1月20日	今津	中屋与左衛門
1月5日	長島	大杉屋利助	閏1月21日	米原	柏屋惣兵衛
1月6日	三木	塩屋松兵衛	閏1月22日	谷汲	表く屋大坊
1月7日	井田	大黒屋善八	閏1月23日	鷓沼	橋屋又右衛門
1月8日	那智山	宝如坊	閏1月24日	大久手	ふたばや友五郎
1月9日	湯峯	島屋伝次郎	閏1月25日	三留野	若坂屋伴次郎
1月10日	志ば(檜葉カ)	中屋幸七	閏1月26日	宮ノ越	柏屋又左衛門
1月11日	切目	中屋弥兵衛	閏1月27日	洗馬	志なのや忠助
1月12日	宮原	山形屋平蔵	閏1月28日	法橋	機屋三郎次
1月13日	むまつぎ	有田屋慶助	閏1月29日	善光寺	現金屋源兵衛
1月14-15日	高野山	藤野坊	閏1月30日	坂城	平林与惣右衛門
1月16日	横山	米屋惣兵衛	2月1日	小諸	上田卯源次
1月17日	(不明、大坂カ)	(不明)	2月2日	松井田	つちや国三郎
1月18日	大坂	松屋源助	2月3日	大胡	蛭子屋桑次
1月19日	ご志る(御所カ)	申屋清右衛門	2月4日	足尾	やお屋源右衛門
1月20日	西門前	大坂屋利平	2月5日	今市	糺や壹平
1月21日	奈良	かど屋新吉	2月6日	大田原	中野屋忠左衛門
1月22日	長池	かとや清吉	2月7日	白河	ちとせ屋
1月23日	瀬田	松屋清右衛門			

旅行者：角田藤左衛門(他計5名(変動あり))／行程：陸奥国石川郡形見—伊勢神宮・西国札所・上方・金毘羅宮
※『石川町史下』(石川町教育委員会、1968年)より作成。天保10年『浪華組道中記』もしくは嘉永5年『浪花講定宿帳』掲載の宿屋は太字。

表4 『伊勢参宮道中記』（嘉永2年〈1849〉）の宿泊所

月日	宿泊地名	宿屋名	月日	宿泊地名	宿屋名
1月6日	横山	(不明)	2月8日	久能山	川島屋八右衛門
1月7日	広淵	桜井屋清兵衛	2月9日	日坂	敷島屋八十右衛門
1月8-9日	塩釜	稲荷屋某	2月10日	浜松	大和屋善平
1月10-11日	仙台	清水野屋甚右衛門	2月11日	御油	尾張屋六右衛門
1月12日	大河原	高山屋正吉	2月12日	池鯉鮒	山吹屋新右衛門
1月13日	瀬上	備前屋伝蔵	2月13日	名古屋	銭屋所持右衛門
1月14日	二本松	大坂屋彦三郎	2月14日	桑名	井野屋亀四郎
1月15-16日	郡山	海老屋次右衛門	2月15日	白子	大黒屋九郎左衛門
1月17日	白河	千年屋利平	2月16日	松坂	大石屋喜兵衛
1月18日	大田原	川島屋安右衛門	2月17-18日	伊勢山田	井面館
1月19-20日	今市	住吉屋利兵衛	2月19-20日	松坂	大和屋与兵衛
1月21日	宇都宮	山本屋茂兵衛	2月21日	松坂(西町)	油屋新七
1月22日	間々田	館野良助	2月22日	松坂(西町)	京屋
1月23日	幸手	米屋某	2月23日	平松	東屋佐次兵衛
1月24-30日	江戸	升屋重兵衛	2月24日	島ヶ原	伊勢屋久兵衛
2月1-2日	川崎	新田屋平三郎	2月25日	奈良	茶碗屋某
2月3日	鎌倉	岡田宗助	2月26日	初瀬	小田屋
2月4日	藤沢	葛屋庄右衛門	2月27日	吉野	佐古屋平右衛門
2月5日	小田原	江戸屋孫兵衛	2月28日	高野山	五大院
2月6日	原	丸屋又八	2月29日	河根	中屋国次郎
2月7日	江尻	花屋門次郎	3月1日	福町	柴屋新助

旅行者：小野寺龍太郎（他計6名）／行程：陸奥国磐井郡津谷川—伊勢神宮・上方

※宮城県図書館蔵K290.9-イ2より作成。天保10年『浪華組道中記』もしくは嘉永5年『浪花講定宿帳』掲載の宿屋は太字。

表5 『伊勢参宮道中記』（嘉永3年〈1850〉）の宿泊所

月日	宿泊地名	宿屋名	月日	宿泊地名	宿屋名
1月9日	滝原	伊三郎	2月5日	栃原	(不明)
1月10日	五十里	問屋庄右衛門	2月6日	長島	松屋伊蔵
1月11日	大桑	島屋平兵衛	2月7日	尾鷲	やまとや半六
1月12日	今市	すみよしや利兵衛	2月8日	木本	山本屋文吉
1月13日	宇都宮	かどや利右衛門(「門」欠カ)	2月9日	宇久井	(不明)
1月14日	間々田	立野良助	2月10日	小口	中村屋為助
1月15日	春日部	(不明、「浪花講泊」とあり)	2月11日	本宮	橋本太夫
1月16-17日(カ)	江戸	土屋平兵衛	2月12日	矢倉	和助
1月18日	川崎	(不明、「良蔵組泊」とあり)	2月13日	大股	さかもとや平蔵
1月19日	鎌倉	かどや庄右衛門	2月14日	高野山	(不明)
1月20日	平塚	さるや伊平	2月15日	阿田	つもとや清右衛門
1月21日	箱根	さこや三右衛門	2月16日	多武峰	丸屋徳兵衛
1月22日	吉原	たばこや伝蔵	2月17日	奈良	大津や喜助
1月23日	府中	松ばや文左衛門	2月18日	大坂	かわちや又六
1月24日	金谷	(不明)	2月19日	守口	(不明)
1月25日	浜松	川口治郎兵衛	2月20-22日	京都	ちくぜんや治郎右衛門
1月26日	吉田	ふたばや和三郎	2月23日	大津	小ずちや庄三郎
1月27日	岡崎	つしまや重兵衛	2月24日	武佐	米屋孫平
1月28日	名古屋	大江屋清八	2月25日	川合	三郎右衛門
1月29日	桑名	(不明)	2月26日	君ヶ畑	信濃守
2月1日	上野	ちやうぢや伝蔵	2月27日	多賀	あふぎや喜兵衛
2月2日	櫛田	もちや九郎兵衛	2月28日	関ヶ原	玉屋治三郎
2月3-4日	山田	三田市太夫治良	3月1日	加納	米屋善平

月日	宿泊地名	宿屋名	月日	宿泊地名	宿屋名
3月2日	御嵩	くすりや重兵衛	3月10日	追分	大黒屋新太郎
3月3日	大井	はしもとや	3月11日	板鼻	(不明、「本じん様泊」とあり)
3月4日	三留野	いづみや源治良	3月12日	白井	まるおかや
3月5日	福島	入屋仁右衛門	3月13日	高平	酒屋勘兵衛
3月6日	洗馬	ふくや太郎兵衛	3月14日	戸倉	清吉
3月7日	青柳	大極屋八右衛門	3月15日	桧枝岐	藤左衛門
3月8日	善光寺	藤屋平左衛門	3月16日	木賊	武右衛門
3月9日	坂木	平林与惣左衛門			

旅行者：大和屋（小椋氏、他計11名）／行程：陸奥国会津郡森戸村保城一伊勢神宮・西国札所・上方

※『日本庶民生活史料集成20 探検・紀行・地誌・補遺』（三一書房、1972年）より作成。天保10年『浪華組道中記』もしくは嘉永5年『浪花講定宿帳』掲載の宿屋は太字。

表6 『伊勢参宮道中記并宿附帳』（安政3年〈1856〉）の宿泊所

月日	宿泊地名	宿屋名	月日	宿泊地名	宿屋名
12月5日	板谷	酒井屋平七	1月12日	橋本	河内屋治右衛門
12月6日	八丁目	杣屋銀五郎	1月13日	堺	薩摩屋卯右衛門
12月7日	郡山	海老屋	1月14日	大坂	大和屋和二郎
12月8日	釜子	岩瀬屋万之助	1月15-18日		船中泊
12月9日	大坂	満寿屋	1月19日	正条	なみや
12月10日	太田	大黒屋	1月20日	一日市	(不明)
12月11日	大貫	富士屋	1月21日	三輪	(不明)
12月12日	鹿島	吉野屋善蔵	1月22日	下村	浦屋藤右衛門
12月13日	佐原	大和屋太兵衛	1月23日	金毘羅	毛みち屋茂八郎
12月14日	酒々井	吉田屋半右衛門	1月24日	丸亀	肥前屋藤蔵
12月15-18日	江戸	米沢屋四郎兵衛	1月25日	せうし新田	上村屋
12月19日	川崎	藤屋源蔵	1月26日	入中	まんちゃうや弥右衛門
12月20日	鎌倉	丸屋源助	1月27日	姫路	銭屋
12月21日	小田原	島屋源五郎	1月28日	大久保	はやしや与次兵衛
12月22日	沼津	高田弥惣左衛門	1月29日	西宮	十文字屋
12月23日	江尻	小鶴屋政右衛門	2月1日	伏見	三河屋
12月24日	鞠子	桑名屋善兵衛	2月2-3日	京都	縫物屋加兵衛
12月25日	掛川	矢ノ口屋伊左衛門	2月4日	草津	志満屋
12月26日	戸倉	大黒屋	2月5日	鳥居本	天川屋伊勢次
12月27日	門谷	差物屋善市	2月6日	美江寺	松屋重左衛門
12月28日	御油	池田屋代吉	2月7日	太田	坂本屋庄助
12月29日	知立	山吹屋新右衛門	2月8日	大井	藤屋七右衛門
12月30日	名古屋	銭屋長兵衛	2月9日	野尻	布袋屋与右衛門
1月1日	桑名	舟津屋藤助	2月10日	奈良井	越後屋藤兵衛
1月2日	津	野口屋平六	2月11日	岡田	(不明、「御本陣」とあり)
1月3日	山田	中川安太夫	2月12-13日	篠ノ井	菱屋丈次郎
1月4日	山田(カ)	中川安太夫(カ)	2月14日	小諸	桐屋清左衛門
1月5日	松坂	佐々原吉五郎	2月15日	松井田	穀屋金升金左衛門
1月6日	平松	東屋佐次兵衛	2月16日	柴	柏屋武右衛門
1月7日	大河原	伊賀屋平助	2月17日	岩船	大黒屋弥右衛門
1月8日	奈良	小刀屋平助	2月18日	中粕屋	中屋
1月9日	長谷	小島屋甚次郎	2月19日	古峯ヶ原	別当前岡隼人
1月10日	六田	辰己屋忠左衛門	2月20日	今市	板屋安右衛門
1月11日	高野山	清浄心院			

旅行者：五郎右衛門（他計3名カ）／行程：米沢一伊勢神宮・上方・金毘羅宮

※『三沢郷土誌』（三沢公民館、1981年）より作成。嘉永5年『浪花講定宿帳』もしくは文久3年『諸国定宿帳浪花講』掲載の宿屋は太字。

表7 『参宮道中諸用記』(文久2年(1862))の宿泊所

月日	宿泊地名	宿屋名	月日	宿泊地名	宿屋名
8月22日	塩越	岡本与兵衛	9月27日	三石	福田や五右衛門
8月23-24日	吹浦	村上勘左衛門	9月28日	藤井	大松や喜平次
8月25-26日	酒田	はりまや太兵衛	9月29日	瑜迦	太兵衛
8月27日	狩川	大黒屋権助	9月30日		船中泊
8月28日	羽黒山	(不明、「宿坊」とあり)	10月1日	琴平	久太郎
8月29日	鶴岡	吉川屋喜兵衛	10月2日	金毘羅	斎右衛門
8月30日	大山	川内屋万次郎	10月3日	田口	寅五郎
閏8月1日	温海	斎藤太郎右衛門	10月4日	岡山	吉のや助次良
閏8月2日	中村	七兵衛	10月5日	片上	蛭屋林治
閏8月3日	村上	佐五兵衛	10月6日	鶴亀	猶次郎
閏8月4日	中条	権次郎	10月7日	姫路	米屋清右衛門
閏8月5日	新発田	乙次郎	10月8日	長池	清右衛門
閏8月6-7日	新潟	秋田屋良之助	10月9日	兵庫	嘉兵衛
閏8月8日	弥彦	三郎右衛門	10月10日	西宮	大平屋茂兵衛
閏8月9日	出雲崎	金兵衛	10月11日	中山寺	嘉平
閏8月10日	鯨波	武蔵	10月12-15日	大坂	松屋源助
閏8月11日	潟町	儀左衛門	10月16日	福町	武蔵
閏8月12日	新井	八郎右衛門	10月17日	橋本	川内や治右衛門
閏8月13日	関川	甚四郎	10月18日	高野山	心南院
閏8月14-15日	善光寺	(不明、「宿坊」とあり)	10月19日	学文路	玉や与次右衛門
閏8月16日	野尻	升や太助	10月20日	土田	竹や岩吉
閏8月17日	高田	儀左衛門	10月21日	多武峰	まつや佐兵衛
閏8月18日	名立	塚本治兵衛	10月22日	長谷	又一郎
閏8月19日	青海	金兵衛	10月23日	当麻寺	権右衛門
閏8月20日	市振	仁右衛門	10月24-25日	奈良	佐兵衛
閏8月21日	三日市	あさしや新左衛門	10月26日	小原	弥兵衛
閏8月22日	富山	下条や利右衛門	10月27日	伊勢路	武左衛門
閏8月23日	高岡	常次郎	10月28日	六軒	喜右衛門
閏8月24-29日	竹橋	出村屋又四郎	10月29-11月1日	山田	三日市太夫(カ)
9月1日	金沢	豊右衛門	11月2日	六軒	喜右衛門
9月2日	本吉	六兵衛	11月3日	白子	次郎兵衛
9月3日	大聖寺	いとや七右衛門	11月4日	桑名	清左衛門
9月4日	三国	久右衛門	11月5日	名古屋	近江や清八
9月5日	福井	久右衛門	11月6日	池鯉鮒	山吹や新右衛門
9月6日	永平寺	元右衛門	11月7日	赤坂	市右衛門
9月7日	鯖江	かみや栄助	11月8日	三日市(三ヶ日カ)	熊吉
9月8日	今庄	長浜や九右衛門	11月9日	浜松	米屋
9月9日	柳ヶ瀬	かがや吉兵衛	11月10日	日坂	川坂や治右衛門
9月10日	長浜	志保や又右衛門	11月11日	藤枝	半兵衛
9月11日	高宮	玉や清助	11月12日	江尻	嘉七
9月12日	鏡山	仁三郎	11月13日	吉原	勝次郎
9月13日	大津	魚や卯助	11月14日	三島	治郎右衛門
9月14-19日	京都	勘右衛門	11月15日	小田原	四郎兵衛
9月20日		船中泊	11月16日	平塚	安兵衛
9月21日	大坂	松屋源助	11月17日	鎌倉	神主小池石見
9月22日	西宮	大平屋茂兵衛	11月18日	横浜	幸次郎
9月23日	兵庫	嘉兵衛	11月19日	川崎	吉次郎
9月24日	明石	橋本や久右衛門	11月20-26日	江戸	竹屋藤助
9月25日	石宝殿	はたこや彦兵衛	11月27-12月2日		三島屋権次
9月26日	正条	丸や利右衛門	12月3日	越ヶ谷	川内屋清吉

月日	宿泊地名	宿屋名	月日	宿泊地名	宿屋名
12月4日	幸手	いとや清吉	12月14日	渡瀬	三升や太兵衛
12月5日	新田	幸之助	12月15日	湯原	高橋孫右衛門
12月6日	宇都宮	いねや庄平	12月16日	山形	柴田や伝七
12月7日	日光	釜屋喜三郎	12月17日	楯岡	西屋十治郎
12月8日	大沢	松や周五郎	12月18日	船形	早川や長次兵衛
12月9日	喜連川	久助	12月19日	金山	柴田九平次
12月10日	白坂	岩井屋清右衛門	12月20日	院内	阿部や吉右衛門
12月11日	白河	喜左衛門	12月21日	横手	湊や紋兵衛
12月12日	本宮	はきや久米吉	12月22日	北野目	惣右衛門
12月13日	福島	黒沢六郎兵衛	12月23日	荒沢	文右衛門

旅行者：今野於以登（他計4名）／行程：出羽国本荘一上方・金毘羅宮・伊勢神宮

※『本庄市史史料編Ⅳ』（本庄市、1988年）より作成。嘉永5年『浪花講定宿帳』もしくは文久3年『諸国定宿帳浪花講』掲載の宿屋は太字。

(本稿はJSPS科研費26770213、および郵政歴史文化研究会第5分科会における調査の成果です。調査にご協力いただいた郵政博物館のみなさま、様々な助言を賜った山本光正先生をはじめとする第5分科会のみなさまに厚く御礼申し上げます)

(たかはし よういち 東北大学 東北アジア研究センター 助教)